

感情に関するモニタリングが、怒り感情制御方略の使用に与える影響

吉 田 琢 哉¹

自己の感情をどのように制御するのかという感情制御の問題は、個人の適応と深い関わりを持ち、これまでに多くの尺度が開発され、主に精神的健康との関連においてその効果が検討されている。それらの尺度の多くは、表出－非表出を軸として尺度構成がなされ (Watson & Greer, 1983; Roger & Najarian, 1989; King & Emmons, 1990; Buss & Perry, 1992; Bleiker, Van der Ploeg, & Hendriks, 1993; Kring, Smith, & Neal, 1994; Gross & John, 1995; Spielberger, 1999; Conway, Csank, Holm, & Blake, 2000; Stanton, Kirk, Cameron, & Danoff-Burg, 2000; Gross & John, 2003), 感情を表出するのと抑制するのではどちらが適応的であるのかといった視点で検討がなされてきた。しかし、殊ネガティブな感情については表出も抑制も不適応的であるとの報告が多く (Bleiker et al., 1993; Donnellan, Trzesniewski, Robins, Moffitt, & Caspi, 2005; Feeney, 1999; Gross & John, 1995; Harmon-Jones, 2003; Lavee & Ben-Ari, 2004; Maisto & Lester, 1997; Martin & Dahlen, 2005; Martin, Wan, David, Wegner, Olson, & Watson, 1999; Mennin, Heimberg, Turk, & Fresco, 2005; Perez, Vohs, & Joiner, Jr., 2005; Sperberg & Stabb, 1998; Trombelli, Scapoli, Tatakis, & Grassi, 2005), 近年では気晴らし (及川, 2003) や再評価 (Gross & John, 2003; 久木山, 2002; Mayer & Stevens, 1994) といった、認知的な方略を含めての制御方略の効果といったものが注目されている。特に怒り感情については、怒りに特化した感情制御に関する尺度が作成されたり、抑うつ危険因子として捉えられる反すうの影響が検討されたりと、特に注目されている。これは、怒りの感情が対人関係を破壊してしまうリスクを多く伴っているためであろう。

このように感情制御、特に怒りの感情についての制御方略についての効果研究は多く見られるが、感情制御とは制御方略の分類のみを表すわけではない。感情制御

の定義については、Kring & Werner (2004) や Larsen & Prizmic (2004) が指摘するように、領域によって、また研究者によって様々であるが、少なくとも感情生起体験についての認知的な処理プロセスを経て感情制御方略は決定されるものと考えられる。

感情制御における認知的な要素については、以下に挙げるように、これまでにさまざまな下位概念が提唱されている: Bagby, Taylor, & Parker (1994) の Tronto Alexithymia Scale (TAS-20), Mayer & Stevens (1994) の Meta-Experience Scale (MES), Swinkels & Giuliano (1995) の Mood Awareness Scale (MAS), Stanton et al. (2000) の Emotional Approach Coping Scale (EAC), 坂上・菅沼 (2001) の個別情動に対する意識的態度尺度, Vorst & Bermond (2001) の Bermond-Vorst Alexithymia Questionnaire (BVAQ), 久木山 (2002) の情動コンピテンス尺度, Gratz & Roemer (2004) の Difficulties in Emotion Regulation Scale (DERS), そして Gasper & Bramesfeld (2006) の Following Affective States Test (FAST) がある。これらの尺度の下位概念を概観すると、自己の感情のモニタリング、他者の感情のモニタリング、そして状況のモニタリングという、3つのモニタリングに関する要素が含まれていると考えられる。

自己感情のモニタリングについては、能力的側面と志向的な側面の双方が含まれている。能力的側面とは、自己の感情に注意を向け、理解する能力を意味しており、TAS-20の感情識別の困難と感情言語化の困難、MESのメタ評価尺度のうち明確性、許容性と影響力、MASの情動ラベリング、個別情動に対する意識的態度尺度の自己の情動の覚知、BVAQの識別化と言語化、そしてDERSの自己感情明確性の欠如などがこの能力的側面に相当すると考えられる。他方で、自己感情モニタリング志向性とは、自己の感情に注意が向きやすい傾向を表しており、TAS-20の外面性志向の思考、MASの情動モニタリング、EACの感情の明確化、個別情動に対する意識的態度尺度の情動に対する内省傾向、BVAQの分析、情動コンピテンス尺度の自分の情動の覚知、DERSの自

¹ 名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士課程 (後期課程)。本論文の執筆にあたり、濱家徳子さんには有益な御示唆を頂きました。記して感謝いたします。

己感情への注意傾向の欠如、FASTの全4因子を合わせた11の尺度が志向的な側面に相当すると考えられる。また他者感情のモニタリングとは、相手の感情に注意を向け、理解する傾向を表す。この側面については、既存の尺度で扱っているものは欧米のものではなく、個別情動に対する意識的態度尺度の他者の情動の覚知と、情動コンピテンス尺度の他者の情動への関心と共感性が扱っているのみである。そして状況のモニタリングとは、情動を表出することの適切さを評価する傾向を意味している。この概念も、他者感情のモニタリングと同様に欧米の既存の尺度で扱っているものではなく、情動コンピテンス尺度のうち、状況の読み取り因子が扱っているのみである。

これらの認知的な要素の位置づけを明確にする上では、情報処理のプロセスを扱ったモデルを想定しておく必要がある。感情制御に関する認知的なプロセスを扱ったものとして代表的なのは、Crick & Dodge (1994) の改訂版社会的情報処理モデル、Grossによる感情制御プロセスモデル (Gross, 1998, 1999, 2001, 2002)、そして特に怒り感情に限定したモデルとして攻撃の一般モデル (Anderson & Bushman, 2002) などが挙げられる。これらのモデルのうち感情制御プロセスモデルは、感情が生起する前の対処に焦点が当てられており、感情生起後の認知的処理については細分化されたプロセスが想定されていないため、モニタリングの3要素との対応を同定することは難しい。攻撃の一般モデルに関しても、認知的な処理は経路段階として包含されてしまっており、感情に関するモニタリングの要素に対応づけることができない。それに対して改訂版情報処理モデルでは、行動生起に至る認知的な処理の段階が細分化されており、モニタリングに関する3要素を弁別して捉えることが可能である。

改訂版社会的情報処理モデルは、もともと子どもの適応に結びつく対人的な行動を説明するために提案された情報処理モデルであるが、今日では青年期を対象とした社会的行動の説明にも、その有効性が示されている (たとえば久木山, 2002; 吉澤・吉田, 2004)。このモデルでは、手がかりの処理から行動の実行に至るまで、(a) 手がかりの符号化、(b) 手がかりの解釈、(c) 目標の明確化、(d) 反応構築、(e) 反応決定、(f) 行動生起、という6つの段階を仮定している。そして生起した行動に対する相手からの評価や反応がフィードバックされる。さらにそのフィードバックが入力情報となって、再び手がかりの符号化の段階に戻るというループを形成し、それぞれの段階に潜在的知識構造が影響しているというのが、当モデルの概要である。先述のモニタリングに関する3つの要素を改訂版社会的情報処理モデルとの対応で考えると、

自己感情のモニタリングは手がかりの符号化と解釈の段階に、他者感情のモニタリングは相手からの評価、反応の段階に、そして状況のモニタリングは反応決定の段階に相当するものと考えられる。

以上の議論から本論では、Crick & Dodge (1994) による改訂版社会的情報処理モデルに沿って怒りの感情制御をとらえていくこととする。改訂版社会的情報処理モデルでは先述のとおり、状況の解釈を経て、目標に沿った実行可能な行動を決定するという認知的なプロセスを仮定している。このような捉え方は、より感情制御に限定した考え方としてはSalovey & Mayer (1990) の情動知能についての定義が類似している。そこで本論ではSalovey & Mayerによる定義を土台として、感情制御を「対人場面で生起した感情に気づき、状況を考慮に入れて感情を表出するか否かを選択する認知的なプロセス」と定義する。

さて、既述のようにモニタリングに関する3要素は感情制御処理方略という行動の生起に至る認知的な処理プロセスの一部を構成すると言えるが、こうしたモニタリングに関する情報処理が感情制御方略の決定にどのような影響を与えるかについては、久木山 (2002) を除いてはほとんど検討されていない。久木山の情動コンピテンス尺度の中には、上述のように自己感情モニタリング志向性、他者感情のモニタリング、状況のモニタリングに相当する下位因子が含まれており、これらを含む情動コンピテンスとアサーション行動との関連が検討されている。その結果、他者感情のモニタリングのみが、回避行動と負の、アサーション行動と正の関連が見られている。ただし、久木山で扱われた葛藤場面では、相手との関係性が明確になっていない。Conway, Di Fazio, Mayman (1999) は感情表出に関する規範は関係性によって異なってくることを明らかにしており、したがって感情制御方略の効果も、関係性によって異なってくると考えられる。このような観点から吉田・高井 (2007) は、怒り感情の表出を配慮的なものと一方的なものに弁別し、非表出についても抑制と再評価とを弁別した上で、親密でない目上の相手と親密で対等な相手との間で、どのような制御方略が効果的であるかについて比較検討している。その結果、親密でない目上の相手に対しては再解釈方略を用いることが、親密で対等な相手に対しては配慮的な表出を行うことが、より二者間の関係性評価を高めていることが明らかになった。このことは、怒りの制御方略の効果を検討する上では、怒り感情が生起した相手との関係性を踏まえることが必要であることを示している。そこで本研究では、感情制御方略の使用が、認知的な要素によってどれだけ説明されるものかを、関係性の違い

に考慮しつつ検討する。怒りの感情制御方略の使用に与えるモニタリングの効果を検討することは、感情制御の機能不全に対する予防的な介入に貢献する知見の提供という意味でも、意義を持つであろう。

吉田・高井（2007）では怒りの制御方略を一方的表出、配慮的表出、抑制、再解釈、そして第三者への表出という5つに弁別した尺度の作成を行っているが、本論では認知的なモニタリングが二者間での感情制御に及ぼす影響を検討するため、第三者への表出を除く4つの制御方略とモニタリングの関連について検討する。相手との関係性によって効果的な制御方略が異なってくるといふ先の知見を踏まえるならば、モニタリングの要素の中では特に状況のモニタリングを行うことが、効果的な感情制御方略の使用を促進するのではないかと考えられる。状況のモニタリングと怒り感情制御のための各方略との対応を考えると、まず一方的な表出とは相手の立場に配慮しない攻撃的な表出であることから、適切な処理方略とは言えない。木野（2004）によると、言語的な攻撃は関係性に及ぼす効果や適切性についての評価が総じて低いことが報告されている。従って状況のモニタリングを行うならば、こうした不適切な方略は抑制されると考えられる。また配慮的な表出とは、相手の立場に配慮して、相手を不快にさせない形で自分の怒りを伝える方略である。木野ではこの方略に類似した「理性的説得」が、関係性効果や適切性について総じて高く評価されており、吉田・高井では、特に親密で対等な相手に対する場合に、二者間の関係性評価に正の影響を及ぼしている。したがって、状況のモニタリングを行う人は、親密で対等な相手に対した場合に特に、配慮的な表出を行うと考えられる。抑制と再解釈についてはともに相手に対して怒りを表出しないという方略であり、前者は怒りに耐えるという形での非表出を、後者はその出来事をポジティブに捉え直すとするという形での非表出を意味している。相手に表出しないという方略については、特に目上の相手に対してはそれが適切であると認識されており（Conway et al., 1999）、吉田・高井でも、特に再解釈については親密でない目上の相手に対しては有効であることが示されている。これらのことから、状況のモニタリングを行う人は、親密でない目上の相手に対した場合に特に、再解釈方略を選択すると考えられる。

以上のことをまとめると、本研究では怒り感情制御の認知的な側面の個人差を捉えた感情に関するモニタリング尺度を新たに作成し、親密でない目上の相手と親密で対等な相手という2つの関係性に応じた怒りの制御方略の使用との関連を検討する。仮説としては、状況のモニ

タリングの機能に着目して、以下の3つの仮説を立てる。

仮説1 関係性に関わらず、状況のモニタリングは一方的な表出を抑制する

仮説2 親密でない目上の相手に対して、状況のモニタリングは再解釈を促進する

仮説3 親密で対等な相手に対して、状況のモニタリングは配慮的な表出を促進する

自己感情のモニタリングと他者感情のモニタリングの機能については、探索的に検討することとする。

予備調査：感情に関するモニタリング尺度の作成

目的

感情制御についてこれまでに作成された尺度には、認知的な側面を扱ったものだけでも様々なものがあるが、先に挙げた自己感情についてのモニタリングの能力的側面と志向的側面、そして他者感情のモニタリングと状況のモニタリングの各要素を包括したものは未だ作成されていない。そこで本研究では予備調査として、こうした尺度の作成を行い、公的自意識、私的自意識、内的他者意識、そして自尊心との関連から、構成概念妥当性を確認することとする。概念的に予測される点として、まず自己感情モニタリングの能力的側面は、志向的側面と比べてより有能感に近い概念であることから、自尊心との間に正の関連が予想される。一方自己感情モニタリングの志向的側面は、自己の内的な状態に関心を示しやすい傾向であることから、私的自意識との間に正の関連が予想される。また他者感情のモニタリングは、他者に対する注意を示すことから、内的他者意識との間に正の関連が予想される。最後に状況のモニタリングは、自己の外的な状態に注意を向けている傾向を含んでいると考えられることから、公的自意識との間に正の関連が予想される。

方法

調査対象者と手続き 調査は愛知県内の複数の大学で、大学生269名（男性96名、女性173名）を対象に、授業時間内を利用して行われた。調査対象者の平均年齢は19.5歳（ $SD = 1.33$ ）であった。

質問紙の構成 予備調査で用いた尺度は以下の通りである。

1. 感情に関するモニタリング 自己感情のモニタリング、他者感情のモニタリング、そして状況のモニタリングに関する項目群を、先述した既存の尺度を参考に、能力的な側面と志向的な側面の双方を含むように作成した、27項目を使用した。

2. 自意識 菅原（1984）の自意識尺度を使用した。

自己意識尺度は公的自己意識と私的自己意識の2因子からなる21項目の尺度で、公的自己意識の α 係数は.89、私的自己意識の α 係数は.85であった。

3. 内的他者意識 辻 (1993) の他者意識尺度のうち、内的他者意識因子を構成する7項目を使用した。 α 係数は.88であった。

4. 自尊心 山本・松井・山成 (1982) の訳出によるRosenberg (1965) の自尊心尺度を用いた。I-T相関の低さ ($r = -.06$) から項目8を除き、9項目の合計得点を自尊心尺度得点とした。項目8を除いた後の α 係数は.88であった。

結果と考察

感情に関するモニタリング尺度の因子構造 まず因子数を決定するため、因子抽出の基準として最小の固有値を1以上と指定した上で、主因子法による因子分析を行った。固有値の減衰状況や説明率から因子数は4から6の間が妥当と判断され、解釈可能性の観点から4因子解を採用した。SEFA (Kano & Harada, 2000) を用いて探索的因子分析 (主因子法、プロマックス回転) を行った² 後に、1つの因子に対する負荷が.40未満の項目、複数の因子に.30以上の負荷を示す項目、そして適合度を下げている項目を削除しつつ分析を繰り返したところ、最終的にTable 1に示す因子構造となった。適合度は $\chi^2 = 52.62$ ($df = 51$, n.s.), $GFI = .975$, $AGFI = .942$, $CFI = .997$, $RMSEA = .016$ であり、十分な適合度を示していると判断された。

第1因子には状況に対するモニタリングの能力と志向性に関する項目が負荷したことから、“状況のモニタリング”因子と命名した。第2因子には自己感情のモニタリングの志向性に関する項目が高い負荷を示したことから、“自己感情モニタリング志向性”因子と命名した。第3因子には他者感情のモニタリングに関する項目が高い負荷を示したことから、“他者感情モニタリング”因子と命名した。最後の第4因子には自己感情のモニタリングの能力に関する項目が高い負荷を示したことから、“自己感情モニタリング能力”因子と命名した。各因子の信頼性係数は、それぞれ.79, .83, .75, .65であった。これらの結果から、予想通り自己感情のモニタリングについては能力的側面と志向的側面に弁別され、いくつかの項目は削除されてしまったものの、他者感情のモニタリングと状況のモニタリングについても因子が抽出された。自己感情についてののみ能力的側面と志向的側面とに

弁別されたという結果は、従来の自己感情モニタリングに関する諸尺度が能力的側面と志向的側面に大別されるという本論での考え方を支持している。

感情に関するモニタリング尺度の構成概念妥当性の検討 感情に関するモニタリング尺度の構成概念妥当性を検討するため、公的自己意識、私的自己意識、内的他者意識、自尊心との相関係数を算出した。その結果をTable 2に示す。予想通り、自己感情モニタリング能力と自尊心との間、自己感情モニタリング志向性と私的自己意識との間、他者感情モニタリングと内的他者意識との間、そして状況のモニタリングと公的自己意識との間に、それぞれ有意な正の相関が見られた。以上のようにモニタリング尺度の各下位因子は、予備調査で扱った各変数との間で概念的に整合する関連を示したことから、自己意識、他者意識、自尊心との関連からは構成概念妥当性が確認されたと判断した。

本調査

目的

予備調査により作成された、自己感情のモニタリング、他者感情のモニタリング、そして状況のモニタリングについての個人差を測定する尺度を用いて、モニタリングの各要素と感情制御方略の使用についての個人差との関連について検討する。検証する仮説については既述の通りである。

方法

調査対象者と手続き 調査は愛知県内の複数の大学で、大学生170名 (男性80名、女性90名) を対象に、授業時間内を利用して行われた。調査対象者の平均年齢は19.7歳 ($SD = 1.11$) であった。

質問紙の構成 本調査で用いた尺度は以下の通りである。

1. 感情に関するモニタリング 予備調査で作成した感情に関するモニタリング尺度を使用した。

2. 怒り感情制御尺度 吉田・高井 (2007) による怒り感情制御尺度のうち、第三者への表出を構成する項目を除いた17項目を使用した。この尺度を用いて、“それほど親しくはなく、目上の相手” (非親密目上条件) と“親しく、立場が同等の相手” (親密対等条件) の2条件について、怒りを感じた体験について想起してもらい、その内容を記述してもらった上で、その際に用いた感情制御方略についての回答を求めた。条件の提示順序については、カウンターバランスをとった。

結果

感情に関するモニタリングと怒りの制御方略との関連を検討するため、関係性条件ごとに、多変量重回帰分析

² 分析については、下記のホームページにある解析プログラムを利用した。

<http://koko15.hus.osaka-u.ac.jp/sefa/>

Table 1
感情に関するモニタリング尺度の因子構造（主因子法，プロマックス回転）

	F1	F2	F3	F4
<状況のモニタリング>				
16.感情を表現するときにはタイミングを考える	.76	-.13	.08	-.04
7.自分が感じたままのことを言ったら、周りの人がどう思うかを考えてから話す	.66	-.01	-.03	.03
15.周囲の反応を予測して、自分の感じたことを言うべきかどうかを判断できる	.65	.09	-.08	.11
14.相手に対して、どのくらい自分の感情を出しても大丈夫かを考える方だ	.57	.02	.04	-.06
26.感情を出してもいい状況かどうかを判断して、感情を出すよう心がけている	.50	.08	.13	-.02
<他者感情のモニタリング>				
5.相手が何を感じているのかが、よくわかる方だ	.05	.82	-.07	.00
1.相手の表情や態度をみれば、その人がどんな感情を抱いているかが分かる方だ	-.06	.82	.00	-.05
21.相手の意図や本心といったものを探るのが得意だ	.02	.51	.10	.09
<自己感情モニタリング志向性>				
27.自分が何かの感情を覚えた時には、なぜそういう気持ちになったのかを考える方だ	.02	-.02	.78	.00
12.自分の感情に注意を向ける方だ	.01	.08	.66	.07
17.自分がいま何を感じているのかを気にする方だ	.06	-.04	.65	-.04
<自己感情モニタリング能力>				
3.自分の感情がわからなくなることがある	.02	.13	.11	-.79
6.自分が感じていることを、たいてい理解している	.07	.10	-.04	.61
8.特定の感情を感じたとき、なぜそのような感情を抱いたかがすぐにわかる	.14	.05	.05	.49
25.自分がいま感じている感情を言葉にするのは簡単だ	-.27	.01	.23	.40
残余項目				
2.自分が特定の感情を感じたときの状態を、すぐにイメージすることができる				
4.人と接するときには相手に共感しようと心がける				
9.自分の感情の動きには敏感である				
10.自分が思ったことを言ったら相手がどのような反応を示すかが、予想できない				
11.自分が何かの感情を感じた時には、その気持ちをみつめてみる方だ				
13.どのようなものであれ相手の気持ちを理解し受け入れたい				
18.人の感情状態に興味を持って行動している				
19.人がどんな気分にいるのかを、あまり気にしない方だ				
20.その場に適した表情を作るのに苦労する				
22.自分の感情をその場で表すことが適切かどうかを判断できる				
23.言葉で言われないと、相手がどんな気持ちにいるのかわからない				
24.まわりの状況に適した表情を作ることができる				
因子間相関	F1	.46	.44	-.01
	F2		.34	.21
	F3			.00

感情に関するモニタリングが、怒り感情制御方略の使用に与える影響

Table 2
感情に関するモニタリング尺度と自意識、他者意識、自尊心との相関

	2.	3.	4.	5.	6.	7.	8.
1.自己感情モニタリング能力	.03	.16*	-.03	-.20**	-.04	-.01	.38**
2.自己感情モニタリング志向性		.28**	.40**	.17**	.67**	.42**	-.02
3.他者感情モニタリング			.37**	.11	.32**	.63**	.15*
4.状況モニタリング				.43**	.48**	.49**	-.14
5.公的自意識					.34**	.42**	-.32**
6.私的自意識						.56**	-.02
7.内的他者意識							-.13*
8.自尊心							

** $p < .01$ * $p < .05$

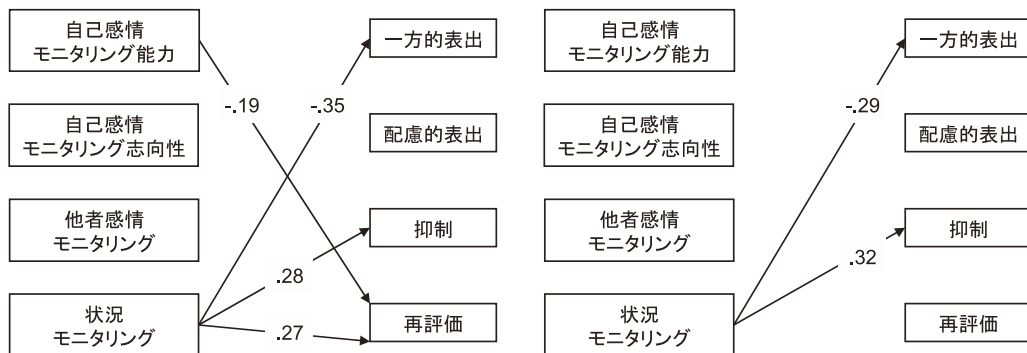


Figure 1 感情に関するモニタリングと怒り感情制御方略との関連についての多変量重回帰分析の結果*

* 5%水準で有意なパス係数のみ記載。共分散、誤差変数については省略している。左側が非親密目上条件、右側が親密対等条件

を行った。その結果をFigure 1に示す。非親密目上条件では、自己感情モニタリング能力が再評価に対して負の関連を示し、状況のモニタリングが一方的表出には負の、抑制と再評価に対しては正の関連を示した。他方で親密対等条件では、状況のモニタリングが一方的表出に負の、抑制に対して正の関連を示すのみであった。

考察

本研究の目的は、これまで別個にとりあげられてきた怒りの感情制御の認知的な要素と行動的な要素との関連を検討し、効果的な感情制御方略を実行する上で、感情に関するモニタリングの各側面がどのように影響するかを明らかにすることであった。感情に関するモニタリングについては、自己の感情、他者の感情、そして状況に関するモニタリングの3つの要素を総じて検討している尺度がまだ開発されていなかったという理由から、その尺度作成を行った。その結果、予想通り自己感情のモニタリングは能力的な側面と志向的な側面とが抽出さ

れ、他者感情と状況に関するモニタリングも抽出された。さらに構成概念妥当性についても、自意識、他者意識、自尊心との関連において確認された。そこでこの尺度を用いて、感情に関するモニタリングの各側面と、一方的表出、配慮的表出、抑制、再解釈という4つの怒り感情制御方略の使用傾向との関連を、非親密目上条件と親密対等条件という2つの関係性にわけて検討した。

以下、仮説に即して考察していくと、まず非親密目上条件でも親密目上条件でも、状況のモニタリングは一方的表出を抑制する効果が見られたことから、仮説1は支持された。一方的表出は今回取り上げた制御方略の中では唯一攻撃行動に相当するものである。したがって、当該状況でどのようにふるまうのが適切であるかを考慮することで、相手との関係を害するような破壊的な行動は抑制される傾向が示されたと解釈できる。モニタリングの要素の中では、状況のモニタリングのみがこのように破壊的な行動を抑制する働きが見られたことで、モニタ

リングの側面の中で、状況についての適切さを考慮することの重要性が示されたと言える。

そして関係性の条件別に状況のモニタリングと配慮的な表出、再解釈との関連を見てみると、まず非親密目上条件では、状況のモニタリングが再解釈方略の使用を促進する傾向が見られたことから、仮説2は支持された。しかし親密対等条件では、状況のモニタリングと配慮的な表出との間に何ら関連は見られず、仮説3は支持されなかった。以上のことから、状況のモニタリングは限定的ではあるが効果的な感情制御を促進する働きが示されたわけだが、親密対等条件での配慮的な表出が状況のモニタリングによって促進されなかったのは何故であろうか。その理由については、少なくとも3つの可能性が考えられる。

まず、状況をモニタリングすることは概して抑制的な行動を導くため、配慮的な表出という積極的な行動は促進されない、という可能性である。本研究の結果でも、状況のモニタリングは一方的な表出を抑制するだけでなく、どちらの関係性条件においても怒りの抑制方略と正の関連を示している。抑制方略は既述のように、精神的健康を低めてしまう危険を伴う方略であることが明らかにされている。つまり状況のモニタリングは、非親密目上条件において効果的な方略である再解釈方略を促進する一方で、非効果的な抑制方略の使用も促進しているということになる。したがって、状況のモニタリングを行うほど効果的な制御を行うことができると結論づけることは、今の段階ではできない。抑制方略と再評価方略の使用を弁別するような、他の認知的な要素を今後検討する必要があるだろう。

2つめの可能性として考えられるのは、配慮的な表出を行うにはある程度のスキルが必要とされるという点である。すなわち、相手の気分を害さずに自己主張を行うという、行動の遂行の困難さの方が、状況のモニタリングよりも配慮的な表出の実行可能性との関連は強いかもしれない。Crick & Dodge (1994) の改訂版社会的情報処理モデルでも、反応決定の段階において、その行動が適切であるかどうかの判断だけではなく、行動をうまく遂行できるという効力感が行動選択に関わってくると仮定されている。ただし、実証研究としてこのような他者配慮を伴った自己主張スキルについての研究は進んでいない。渡部 (2006) は感情制御と関連する領域であるアサーションに関する尺度をレビューした結果から、アサーション研究では理論的には他者配慮の重要性が主張されているものの、尺度として他者配慮的な自己主張を満足にとらえたものの開発は未だ途上であると述べている。したがって、他者配慮的な主張に関するスキルや効

力感の効果については、今後の研究が待たれる領域である。

3つめの可能性として、規範の内在化という問題が挙げられる。本研究における状況のモニタリングに関する予測は、関係性の違いによって効果的な制御方略が異なってくるという吉田・高井 (2007) の知見と、関係性に応じて怒りの制御方略の使用に関する規範が異なってくるという Conway et al. (1999) の知見をベースとしている。しかし厳密には、Conway et al. では規範の違いについて、目上の相手に対しては怒りの表出をするべきではないという規範が明らかにされているのみである。したがって、親密で対等な相手であるならばそれを建設的に伝えるべきであるという配慮的な表出に関わる規範は、人々の中で内在化されていないという可能性も考えられる。そこで今後、親密で対等な関係における怒り制御の規範認知というものを改めて検討する必要があるだろう。

次に状況のモニタリング以外の、モニタリングの要素についての結果について検討する。まず自己感情モニタリングについては、能力的側面が、非親密目上条件で、再評価方略の実行を抑制するという関連が見られた。これは、自分の感情状態をはっきりと認識できる人は、怒りの感情体験を経験した際に、怒りを認識してしまっている分だけ余計に体験を再解釈することが困難であることを示唆している。Crick & Dodge (1994) の改訂版社会的情報処理モデルに即して考えるならば、符号化により怒りというネガティブな感情状態を強く自覚してしまうことで、その他の段階における情報処理が阻害されてしまうのかもしれない。アレキシサイミアの研究などで、これまでは感情体験を意識化できることのメリットが目立ってきたが、感情を意識化できることで生じる困難さもあることを、今回の研究は示唆していると言える。自己感情モニタリングの志向的側面については、どの制御方略に対しても関連を示さなかった。このことから、自己の感情状態に常に注意が向いているからといって、少なくとも即時的な怒りの制御方略を効果的に実行できるわけではないと言える。しかし感情制御方略の効果は本研究で扱ったような即時的な行動のみでなく、感情体験後の持続的な影響も適応を左右する要因となりうる。自己の感情に注意が向いてしまうという傾向は、それがネガティブな感情に特化された場合には、概念的に反すう傾向と類似してくるため、感情体験後のネガティブな感情の処理に対して影響を及ぼす可能性がある。特に怒りの反すう傾向については精神的健康と負の関連を持つことが報告されているため (Gilbert, Cheung, Irons, & McEwan, 2005; Phillips, Henry, Hosie, &

Milne, 2006; Sukhodolsky, Golub, & Cromwell, 2001), 普段から自己の感情に注意の向きやすい傾向のある人が、ネガティブな感情体験を経験すると反すうに陥ってしまう傾向が見られるのであれば、自己感情モニタリングの志向的な側面も、長期的に見れば負の側面を持っているということになろう。

他者感情のモニタリングについては、自己感情モニタリング志向性と同様、どの方略に対しても関連は見られなかった。今回の調査では、怒り感情が生起してから制御方略を実行するまでの限定されたプロセスを扱っている。このプロセスの中では、他者感情のモニタリングは怒り感情制御方略と関連が見られなかったが、ただし自己感情モニタリング志向性について考察したのと同様、感情制御のプロセスを本研究よりも広義に捉えた場合には、他者感情のモニタリングは、特にフィードバックの過程で関わってくるのではないかと考えられる。制御方略を実行した後の相手の反応に対する解釈過程の中では、相手の感情を推論することは、制御方略を柔軟に変更するために必要な要素の一つであるだろう。

最後に本研究の方法論的な限界について言及する。本研究で測定したのは、過去の体験についての回想による怒り感情制御方略の実行と、特性的に捉えたモニタリング傾向の個人差である。怒りの感情制御における認知的なプロセスをより直接的に検証するためには、実験的な手法を採用することも欠かせない。実験状況の中で情報処理の操作、測定を行うことで、効果的な感情制御を促進する認知的な処理を明らかにしていくことが求められる。

引用文献

- Anderson, C. A., & Bushman, B. J. (2002). Human Aggression. *Annual Review of Psychology*, 53, 27-51.
- Bagby, R. M., Taylor, G., & Parker, J. D. A. (1994). The twenty-item Toronto Alexithymia Scale-II, convergent, discriminant, and concurrent validity. *Journal of Psychosomatic Research*, 38, 33-40.
- Bleiker, E. M. A., Van der Ploeg, H. M., & Hendriks, J. H. C. L. (1993). Rationality, emotional expression and control: Psychometric characteristics of a questionnaire for research in psycho-oncology. *Journal of Psychosomatic Research*, 37, 861-872.
- Buss, A. H., & Perry, M. (1992). The aggression questionnaire. *Journal of Personality and Social Psychology*, 63, 452-459.
- Conway, M., Csank, P. A. R., Holm, S. L., & Blake, C. K. (2000). On individual differences in rumination on sadness. *Journal of Personality Assessment*, 75, 404-425.
- Conway, M., Di Fazio, R., Mayman, S. (1999). Judging others' emotions as a function of the others' status. *Social Psychology Quarterly*, 62, 291-305.
- Crick, N. R., & Dodge, K. A. (1994). A review and reformulation of social information-processing mechanisms in children's social adjustment. *Psychological Bulletin*, 115, 74-101.
- Donnellan, M. B., Trzesniewski, K. H., Robins, R. W., Moffitt, T. E., & Caspi, A. (2005). Low Self-esteem is related to aggression, antisocial behavior, and delinquency. *Psychological Science*, 16, 328-335.
- Feeney, J. A. (1999). Adult attachment, emotional control, and marital satisfaction. *Personal Relationships*, 6, 169-185.
- Gasper, K., & Bramesfeld, K. D. (2006). Should I follow my feelings?: How individual differences in following feelings influence affective well-being, experience, and responsiveness. *Journal of Research in Personality*, 40, 986-1014.
- Gilbert, P., Cheung, M., Irons, C., & McEwan, K. (2005). An exploration into depression-focused and anger-focused rumination in relation to depression in a student population. *Behavioral and Cognitive Psychotherapy*, 33, 273-283.
- Gratz, K. L., & Roemer, L. (2004). Multidimensional assessment of emotion regulation and dysregulation: Development, factor structure, and initial validation of the difficulties in emotion regulation scale. *Journal of Psychopathology and Behavioral Assessment*, 26, 41-54.
- Gross, J. J. (1998). Antecedent and response focused emotion regulation: Divergent consequences for experience, expression, and physiology. *Journal of Personality and Social Psychology*, 74, 224-237.
- Gross, J. J. (1999). Emotion regulation: Past, present, future. *Cognition and Emotion*, 13, 551-573.
- Gross, J. J. (2001). Emotion regulation in adulthood: Timing is everything. *Current Directions in Psychological Science*, 10, 214-219.
- Gross, J. J. (2002). Emotion regulation: Affective, cognitive, and social consequences. *Psychophysiology*, 39, 281-291.
- Gross, J. J., & John, O. P. (1995). Facets of emotional expressivity: Three self-report factors and their cor-

- relates. *Personality and Individual Differences*, **19**, 555-568.
- Gross, J. J., & John, O. P. (2003). Individual differences in two emotion regulation processes: Implications for affect, relationships, and well-being. *Journal of Personality and Social Psychology*, **85**, 348-362.
- Harmon-Jones, E. (2003). Anger and the behavioral approach system. *Personality and Individual Differences*, **35**, 995-1005.
- Kano, Y. and Harada, A. (2000). Stepwise variable selection in factor analysis. *Psychometrika*. Vol.65, 7-22.
- King, L. A., & Emmons, R. A. (1990). Conflict over emotional expression: psychological and physical correlates. *Journal of Personality and Social Psychology*, **58**, 864-877.
- 木野和代 (2004). 対人場面における怒りの表出方法の適切性・効果性認知とその実行との関連 感情心理学研究, **10**, 43-55.
- Kring, A. M., Smith, D. A., & Neal, J. M. (1994). Individual differences in dispositional expressiveness: Development and validation of the Emotional Expressivity Scale. *Journal of Personality and Social Psychology*, **66**, 934-949.
- Kring, A. M., & Werner, K. H. (2004). Emotion regulation and psychopathology. In P. Philippot, & R. S. Feldman (Eds.), *The regulation of emotion* (pp. 359-385). Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum.
- 久木山健一 (2002). 情動コンピテンスと社会的情報処理の関連—アサーション行動を対象として— カウンセリング研究, **35**, 66-75.
- Larsen, R. J., & Prizmic, Z. (2004). Affect regulation. In R. F. Baumeister, & K. D. Vohs (Eds.), *Handbook of self-regulation* (pp. 40-61). New York: Guilford Press.
- Lavee, Y., & Ben-Ari, A. (2004). Emotional expressiveness and neuroticism: Do they predict marital quality? *Journal of Family Psychology*, **18**, 620-627.
- Maisto, B. A., & Lester, D. (1997). Job satisfaction and suppression of emotions. *Psychological Reports*, **81**, 478-478.
- Martin, R. C., & Dahlen, E. R. (2005). Cognitive emotion regulation in the prediction of depression, anxiety, stress, and anger. *Personality and Individual Differences*, **39**, 1249-1260.
- Martin, R., Wan, C. K., David, J. P., Wegner, E. L., Olson, B. D., & Watson, D. (1999). Style of anger expression: Relation to expressivity, personality, and health. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **25**, 1196-1207.
- Mayer, J. D., & Stevens, A. A. (1994). An emerging understanding of the reflective (meta-) experience of mood. *Journal of Research in Personality*, **28**, 351-373.
- Mennin, D. S., Heimberg, R. G., Turk, C. L., & Fresco, D. M. (2005). Preliminary evidence for an emotion dysregulation model of generalized anxiety disorder. *Behaviour Research and Therapy*, **43**, 1281-1310.
- 及川恵 (2003). 気晴らしの情動調節プロセス—効果的な活用に向けて 教育心理学研究, **51**, 443-456.
- Perez, M., Vohs, K. D., & Joiner, Jr., T. E. (2005). Discrepancies between self-and other-esteem as correlates of aggression. *Journal of Social and Clinical Psychology*, **24**, 607-620.
- Phillips, L. H., Henry, J. D., Hosie, J. A., & Milne, A. B. (2006). Age, anger regulation and well-being. *Aging and Mental Health*, **10**, 250-256.
- Roger, D., & Najarian, B. (1989). The construction and validation of a new scale for measuring emotion control. *Personality and Individual Differences*, **10**, 845-853.
- Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. Princeton: Princeton University Press.
- 坂上裕子・菅沼真樹 (2001). 愛着と情動制御—対人様式としての愛着と個別情動に対する意識的態度との関連— 教育心理学研究, **49**, 156-166.
- Salovey, P., & Mayer, J. D. (1990). Emotional intelligence. *Imagination, Cognition and Personality*, **9**, 185-211.
- Sperberg, E. D., & Stabb, S. D. (1998). Depression in women as related to anger and mutuality in relationships. *Psychology of Women Quarterly*, **22**, 223-238.
- Spielberger, C. D. (1999). *STAXI-2: State-Trait Anger Expression Inventory-2 : Professional manual*. Odessa, Fla: Psychological Assessment Resources.
- Stanton, A. L., Kirk, S. B., Cameron, C. L., & Danoff-Burg, S. (2000). Coping through emotional approach: Scale construction and validation. *Journal of Personality and Social Psychology*, **78**, 1150-1169.
- 菅原健介 (1984). 自意識尺度 (self-consciousness scale)

- 日本語版作成の試み 心理学研究, 55, 184-188.
- Sukhodolsky, D. G., Golub, A., & Cromwell, E. N. (2001). Development and validation of the anger rumination scale. *Personality and Individual Differences*, 31, 689-700.
- Swinkels, A., & Giuliano, T. A. (1995). The measurement and conceptualization of mood awareness: Monitoring and labeling one's mood states. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 21, 934-949.
- Trombelli, L., Scapoli, C., Tatakis, D. N., & Grassi, L. (2005). Modulation of clinical expression of plaque-induced gingivitis: Effects of personality traits, social support and stress. *Journal of Clinical Periodontology*, 32, 1143-1150.
- 辻平次郎 (1993). 自己意識と他者意識 北大路書房
- Vorst, H. C. M., & Bermond, B. (2001). Validity and reliability of the Bermond-Vorst alexithymia questionnaire. *Personality and Individual Differences*, 30, 413-434.
- 渡部麻美 (2006). 主張性尺度研究における測定概念の問題—4要件の視点から 教育心理学研究, 54, 420-433.
- Watson, M., & Greer, S. (1983). Development of a questionnaire measure of emotional control. *Journal of Psychosomatic Research*, 27, 299-305.
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64-68.
- 吉田琢哉・高井次郎 (2007). 関係性に応じた怒り感情制御方略の調整が及ぼす効果の検討 日本グループ・ダイナミックス学会第54回大会論文集, 98-99.
- 吉澤寛之・吉田俊和 (2004). 社会的ルールの知識構造から予測される社会的逸脱行為傾向—知識構造測定法の簡易化と認知的歪曲による媒介過程の検討 社会心理学研究, 20, 106-123.

(2007年9月28日受稿)

ABSTRACT

How Do Cognitive Processes Influence Use of Anger Regulation Tactics?: Exploring the Role of Self, Others, and Situation Monitoring

Takuya YOSHIDA

There has been a number of research on emotion regulation, especially on anger regulation. However, the monitoring aspects of emotion regulation and response styles of anger regulation have been separately explored. Existing scales have tapped various monitoring aspects, which would be extracted to four kinds of monitoring: monitoring skill of one's own emotion, monitoring orientation of one's emotion, monitoring of others' emotion, and situation monitoring. Based on these perspectives, the present research examined the role of each monitoring aspect on use of anger regulation tactics in two different interpersonal relationships: non-intimate target with higher status and intimate target with equal status. In preliminary study, emotion regulation monitoring scale was established to cover four aspects of monitoring. Factor analysis confirmed four-factor structure and construct validity was also confirmed in relation to self consciousness, others consciousness, and self esteem. Then the relationship between these four aspects of monitoring and four types of anger regulation tactics: emotional anger expression, anger expression with target concern, suppression, and reappraisal. As predicted, results showed that situation monitoring suppressed use of emotional anger expression in both agent conditions. Toward non-intimate target with higher status, situation monitoring promoted use of reappraisal, which also supported hypothesis. Toward intimate target with equal status, however, situation monitoring had no effect on use of anger expression with target concern. As to other monitoring factors, skill of monitoring one's emotion suppressed use of reappraisal toward non-intimate target with higher status. Neither orientation of monitoring one's emotion and monitoring others' emotion showed any effect on anger regulation tactics. As no effect was found on anger expression with target concern, the role of interpersonal skill was discussed in relation to social information model.

Key words: anger regulation, means of regulation, agent of arousal, target of expression